

# 若者と高齢者 交

渡さん(18)と、大学1年生の池本次朗さん(19)だ。通学などで自室を出る際の声かけや、月1回の入居者や地域住民とのお茶会の企画・参加が、ノビシロハウスに住む若者たちの主な役割だ。こうした役割を果たすことで家賃(月7万円、管理費別)は半額になる。

将来は起業したいと考える岡田さんは昨年2月、独立心を養おうと、実家を出てノビシロハウスでの1人暮らしに踏み切った。高齢者と交流する役割は、あまり重荷には感じていないという。むしろ「帰ってくると緩やかに見守ってくれる人がいて、ホッとした気持ちになる」と話す。最近「自分から積極的にインターホンを押して入居している高齢者を訪ね、交流する時間を求めている」という。

共有スペースにあるカフェで談笑する(左から)池本さん、梅村さん、岡田さん、鮎川さん(昨年11月、神奈川県藤沢市で)

通ったという。家探しは若い住人に高齢者へのかかわ



エアコンを清掃する古川さん(右)。高齢者の困りごとを、地域住民の力を借りて解決する試みが広がっている(昨年12月、東京都豊島区で)

## 日常の困りごと解決

### 地域と助け合い 新たな仕組み

高齢になると、日常の作業でも自力で解決するのは難しくなりがちだ。庭の掃除、スマートフォンでの操作、高所での作業などで、誰かの助けを必要とする場面も少なくない。そんな困りごとを、地域住民との助け合いで解決する新たな

仕組みが生まれている。

日常のさまざまな問題を解決する仲介サービスの一つが「iki-iki(イキイキ)」だ。利用希望者が電話や専用サイトで作業を依頼すると、運営会社から登録した地域住民にSNSなどで一斉連

# ろう時代へ挑む

小林 篤子

それから100年余り。長く引くコロナ禍で多くの人が苦しんでいる。真っ先に影響を受けたのは女性や子ども、高齢者だ。私たちがつくる「安心の設計」面でも、ひとり親

家庭の困窮ぶりや生理用品さえ買えない「生理の貧困」、病気の治療をあきらめてしまふ人の存在など、様々な問題をとり上げてきた。

弱者にしわ寄せがいくのはいつの時代も変わらない。コロナ禍は、社会にすでに存在していた格差や脆さを浮き彫りにしたのだらう。

生まれた環境や親次第で人生が決まる、という意味で使われる「親ガチャ」が昨年の新語・流行語大賞のトップ10に選ばれた。甘えている、などと若者への批判もあるが、最初にこの言葉を知ったのは約2年前、児童養護施設取材した時だった。「虐待する親を『毒ガチャ』と呼ぶ子もいます」と教わった。

言葉の軽さの裏にある、あきらめと自嘲の響きに胸が痛む。だが同時に、原則18歳で自立を迫られる彼らを支える人たちの活動も知った。負の連鎖を断ち切るうともかく若者への支援は、渋沢が試みた「貧富の懸隔」を埋める取り組みの一つかもしれない。

今年から戦後のベビーブー

ムで生まれた「団塊の世代」が、75歳の後期高齢者になり始める。医療や介護の現場を支える職員が不足し、社会保障にかかる費用が膨大になる「2022年危機」とも「25年問題」の入り口とも言われている。

私たちがこの危機をどう乗り越えるのか。安心の設計面は今年、「挑む」を年間テーマに掲げた。第1部の取材で各地に足を運んだ記者たちが見たのは、支えられる側だったはずの高齢者が、時に支える側として活躍する姿だ。

若い若きも、支え、支えられて共に生きる。一方通行の慈恵の時代から形を変え、互いに助け合う現場を伝える「安心」の紙面にした。

絡が入り、都合の良い人が支援に駆けつけるといふ仕組みだ。利用するための基本料金は、1時間1500円で、支援する住民に1200円の報酬が入る。

支援にまわる人は地域で時間に余裕がある主婦や若者世代が中心。主な任務は、高齢や障害が理由で日常のちょっとした作業が難しくなった人たちへの支援だ。

東京都豊島区ではフィットネス講師の古川杏梨さん(37)は、同区周辺でのサポートに奮闘している1人だ。依頼があれば、支援を求める人の自宅などを訪ね、エアコンの清掃といった雑事をこなす。

古川さんが普段、フィットネス講師として活躍するのはオンラインが中心だ。フィットネス教室に参加する生徒の人たちとの交流を通じ、高齢者や妊婦、子育て中の母親など、日常の行動に不自由している人が多いことを知ったという。そこで古川さんは、人が支え合う地域を作りたいと、「イキイキ」を通じた活動に力を入れるようになった。

かつて地域に顔が見える関係があった時代は、近隣で困っている人がいれば、助け合うことができた。対面の交流が乏しい環境へと時代が変化の中で、新しい形で絆を復活させようとする試みが各地で模索されている。

「イキイキ」の運営会社を経営する大場航期さん(51)は「今のところ全国41エリアで導入が決まっている。1人の力には限界があるが、地域の人と助け合っていけば、様々な課題の解決につながるはずだ」と語る。

\*この連載は、板垣茂良、沼尻知子、小野健太郎、阿部明電、村上藍、平井翔子が担当しました。

社会保障部 介護や年金、高齢者・障害者福祉、雇用、子育て、貧困など社会保障分野を取材。部員18人で月曜～水曜朝刊の「安心の設計」面を主に担当する。

の慈善的なが渋沢を訴え「。健康の稲松